

[論文]

## 与謝野晶子と漢詩文～『みだれ髪』における李白

小清水 裕子

Akiko Yosano and Chinese Poetry ~Li Bai in “Midare-gami”

Yuko Koshimizu

キーワード：与謝野晶子、みだれ髪、李白、漢詩

Key Words : Akiko Yosano, Li Bai, Midaregami, chaineese poetry

要約：与謝野晶子の第一歌集『みだれ髪』は、西欧的な短歌集であるという評価がなされているが、一方で日本古典の血脈となる、中国の古典である漢詩志向も見られる。これは晶子の受けた故郷の堺での漢詩文教育と、与謝野鉄幹の影響が大きい。

『みだれ髪』では晶子の鉄幹に対するオマージュから、鉄幹の憧憬する中国の唐代の詩人、李白に対するオマージュも同時に示される。このことは特に「蓮の花船」の章において見られる。この章で蓮の花を李白と見なすことは晶子のみならず、鉄幹も同様に認識しており、漢詩志向の顕著な表れとみられる。また、『みだれ髪』における李白の投影について整理し、李白の詩「清平調詞 三首」を用いて、『みだれ髪』との関わりについて指摘する。

はじめに、

与謝野晶子は明治から大正に文芸の場で活躍した女性である。そしてその短歌作品は日本の義務教育の国語の教科書に採用され続けていることから、晶子はわが国を代表する女流歌人として評価されている。

晶子の処女出版である『みだれ髪』<sup>(1)</sup>（出版時の明治34年8月は「鳳晶子」と名乗る）は晶子自身の恋愛を背景にした作品、青春を高らかに歌い上げた作品が多く、晶子の自由で大胆な一面が象徴的に示されている。そのことは発表当時の文芸界のみならず社会にも強い衝撃を与え、以降の晶子の自由と平等を求める言説の出発点として高く評価されている。このような当時としては先進的な晶子のグローバルな志向と相まって、藤島武二による『みだれ髪』の装丁に用いられたモチーフが、ハート（図・1）やキューピット（図・2）が用いられているところから、歌集全体が西欧風であるとの偏ったイメージが先行しがちである。



図2 『みだれ髪』表紙



図1 「恋愛」『みだれ髪』挿絵

ところが、『みだれ髪』の中には、日本の古典を踏まえた作品や、さらに中国の古典である漢詩文を踏まえて、中国古典と日本古典の血脈を途絶えさせることなく、新たな晶子独特の表現をしている作品が散見される。『みだれ髪』が真の意味で近代化した短歌作品集と評されてしかるべきであろう。

晶子は『みだれ髪』以降も漢詩文を踏まえて作品を表現するという姿勢に変わりはなく、それは晶子が行った『源氏物語』口語訳においても認められる。<sup>(2)</sup>

大正から昭和にかけて「高島屋百選会」においても特に楊貴妃をモチーフに用いた唐代の漢詩文を意識した作品が散見する。

晶子がこのように漢詩文を踏まえた作品を生涯表現し続けたのは、晶子自身の漢詩文に対する文学的素養によるところと、その志向の表れであろう。

これらのことは晶子が少女期に受けた漢詩文の教育や夫である鉄幹の漢詩文の志向によるところが大きいと考えられる。

## 1、少女期の晶子と漢詩文とのかかわり

### 1-1 堺の漢学塾

まず、晶子が夫となる与謝野寛（鉄幹）の住む東京に上京した明治34年6月まで、晶子は大阪・堺で父が営む老舗の菓子屋「駿河屋」の娘として暮らした。この大阪・堺という風土<sup>(3)</sup>が晶子の漢詩文教育に大きな影響を与えている。そこでまずは堺の漢詩文教育の風土について整理しておきたい。

堺は中世から世界に開かれた貿易都市として経済的に豊かな、町人の活躍する自由な自治都市として成長を遂げた。江戸時代には士農工商の身分制度の中では、特に町人の活気のある街として名を馳せていた。武家の子弟の教育には藩校があったが、その藩校と同等レベルの町人の子弟に対する教育が熱心に行われていた。それは郷学所（郷校）や私塾によって支えられていた。特に私塾においては、漢学塾が多く堺に集まった。

この私塾（漢学）の中でも広瀬旭窓が「咸宜園」の教えを関西方面に展開するために、弟子の勧めで、その本拠地として堺に1836年（天保7年）7月7日に漢学塾を開塾<sup>(4)</sup>していることは注目に値する。

広瀬旭窓は、九州の日田に「咸宜園」を開塾した広瀬淡窓の弟である。旭窓は兄を引き継ぎ、弟子の教育に従事した人物である。「咸宜園」については、文化庁の「日本遺産」の第1号として「近世日本の教育遺産群」<sup>(5)</sup>（茨城県・水戸の「弘道館」、栃木県・足利の「足利学校」、岡山県・備前の「閑谷学校」、大分県・日田の「咸宜園」の四箇所。）として2015年4月に認定されたことは記憶に新しい。文化庁が咸宜園の近世日本の教育遺産とした理由として、

我が国では、近代教育制度の導入前から、支配者層である武士のみならず、多くの庶民も読み書き・算術ができ、礼儀正しさを身に付けるなど、高い教育水準を示した。これは、藩校や郷学、私塾など、様々な階層を対象とした学校の普及による影響が大きく、明治維新以降のいち早い近代化の原動力となり、現代においても、学問・教育に力を入れ、礼節を重んじる日本人の国民性として受け継がれている。<sup>(6)</sup>

と述べている。このように、日本の教育制度の中にあっても大きな影響を及ぼした広瀬淡窓・旭窓の「咸宜園」の教育は、

封建制度下にありながら、「三奪法」といって、武士・町人・農民の身分、また

年齢や学歴にこだわらず、平等に扱い広く門戸を開きました。入門後は無級から厳しい試験によって 9 級まで昇る道が設けられていましたが、学業の他に各人の能力に応じて塾の仕事を分担させ、実務面での人材の育成にも力を入れました。<sup>(7)</sup>

と説明されるように、自由であり、実力主義の、まさに堺の町人風土に合致したものであった。堺に旭窓が咸宜園学派の私塾を開塾にあたり、その弟子たちが京都・大阪などの候補地を挙げたが、「まずは堺で」ということとなった（堺在住の咸宜園門弟で医師の小林安石<sup>(8)</sup>の招きに依るところが大きい。）。つまり、堺は旭窓の開塾当時、新しい塾を受け入れられる風土であったことに他ならない。

また、明治時代になっても堺の町には江戸時代に引き続き漢学塾が多く集まった。晶子の夫となる与謝野寛（鉄幹）も 11 歳の頃（当時大阪の安藤家に養われていた。そのため安藤姓を名乗っていた）、わざわざ大阪から漢学塾の多い堺の河合坤庵、高木秋水に通い漢籍と漢詩を学んだ。<sup>(9)</sup> そのまもなく後に寛は『海内詩媒』に漢詩を発表するようになり、文芸家の一步を踏み出すことになる。

## 1-2 晶子の漢詩志向

晶子はこのような漢学盛んな堺の風土の中で育ち、しかも自宅には父や兄などが蒐集した書物があった。漢籍をはじめ日本の古典の書物の多くが蓄えられ、晶子は漢詩に触れることのできる家庭環境にあった。このような少女時代を晶子は

十歳位の時から歴史類や文学類の書物を家庭に秘密で読む中に俳句や歌の集も読んで居ましたが、歌俳句はやかましい作法や秘訣のあるらしいのが厭ですし、其内容が漢詩にも劣ったもので大したものではないらしいと思って冷淡に見て居ました。<sup>(10)</sup>

と「私が歌を詠み始めた動機」で回想している。俳句や歌が「漢詩に劣っている」と考えていたのである。それだけ晶子の少女時代は強く漢詩に惹かれていたことを示している。

晶子の弟子の佐藤春夫は、『晶子曼荼羅』（石井柏亭画・昭和二十九年九月講談社刊）「ふたなさけ」において、自著の「トリック」について解説を施している。

拙作の前半に多くの史実を加へて少しく冗長に過ぎる程度の実は後半の虚構を事実らしく錯覚させるために用ゐたトリック

以上の春夫本人の解説から、『晶子曼荼羅』の第一章「十五の少女」に描かれた、晶子の少女時代はほぼ史実と受け止められる。第一章の内容を要約すると、「晶子が樋口朱陽先生<sup>(11)</sup>の漢学塾に九歳から通い始め、論語の素読などを学んでいた。晶子が十五歳の頃、女学校の小田先生から源氏物語は白楽天の長恨歌から出たものと聞き、長恨歌を自ら望んで習い始めた。」そして第一章の最終部分は晶子の歌を引いて、締めくくられている。

あなかしこ楊貴妃のごと斬られむと思ひたちしは十五の少女

げにもこれは十五の少女の願望としてはゆゆしい限りのもので、この少女の世の常の者でない事をよく語つてゐる。

このように春夫は『晶子曼荼羅』で、晶子が少女時代に漢詩を積極的に学んだことを明らかにし、その結果、日本の文芸界を牽引する与謝野晶子が誕生したことを事実として示しているのである。

さて、春夫が引いた「あなかしこ楊貴妃のごと斬られむと思ひたちしは十五の少女」の短歌は「明星」（明治 41 年 11 月 8 日）初出、『佐保姫』（明治 42 年 5 月）所収の短歌である。晶子が少女時代を回想し「ああ私も楊貴妃のように斬られてしまいたいわ、などと思い始めたのは十五の乙女の頃だったわ」という内容である。晶子が中国の古典、とりわけドラマチックな漢詩の世界に憧れていたことが理解できる。特に晶子は楊貴妃に憧れていた。「幼くてよしと思ひき楊貴妃も小野のお通の浄瑠璃姫も」（昭和 9 年 4 月 3 日「読売新聞」掲載）の短歌も楊貴妃に対する晶子の憧憬を端的に示している。

つまり晶子は楊貴妃を題材にした漢詩は特に好んで読んでいたことが窺われるのである。先の『晶子曼荼羅』でも、『源氏物語』を端に、白居易の「長恨歌」を漢学塾で進んで学んだことが記され、春夫は「あなかしこ楊貴妃のごと斬られむと思ひたちしは十五の少女」を示して、晶子の類い希な才能の根拠としている。このことは漢詩に造詣の深い春夫だからこその着眼点である。

春夫の『晶子曼荼羅』の「十五の少女」では『源氏物語』、「長恨歌」、「楊貴妃」という単語を連鎖的に展開させ、晶子の日本古典と漢詩文の素養を象徴的に示している。この『源氏物語』は中国の楊貴妃と玄宗皇帝の悲劇の物語を踏まえた日本の古典作品である。ここまでの連鎖を歌に詠み込むことは従来表現としても一般的である。ところが、春夫が引用した晶子の歌は楊貴妃が斬られるという表現から、杜甫の漢詩「哀江頭」を導き出しているのである。ここでは詳述を避けるが、「あなかしこ・・・」の晶子の短歌は楊貴妃の最期を自身と重ねて詠んでいる情熱的な短歌である。しかし、楊貴妃の最期は縊り殺されたとされるのが定説であり、「斬られた」というのは、杜甫の詩「哀江頭」による「血汚」＝「斬られて血が出た」を踏まえたものである。この「血汚」問題は、古来より論考され続けている問題である<sup>(12)</sup>。春夫は晶子の漢詩の素養の詰まった楊貴妃の短歌を一例に挙げ、その素養が表面的なものではなく、いかに奥深いものかを明示して、たたえているものと思われる。

そして何より晶子自身も漢詩、その中でもとりわけ唐代の漢詩に対しては思い入れが深いことを、

恋をする大和魂尽きはてぬ山をたたへん唐詩に擬して

と、昭和 3 年 6 月『心の遠景』で詠んで示している。この短歌では、「唐詩を手本として大和歌を詠もう」という晶子の意思が示されている。前述したが、少女期の晶子は日本

の和歌よりも漢詩に傾倒し、その後、鉄幹との出会いによって、短歌に開眼して行くのである。

このように、晶子は少女時代に漢学塾の盛んな堺で、漢詩文を自発的に塾で学び、そして、漢詩文の世界に強く感銘を受けながら、やがて日本の歌である短歌を詠むに至っている。このように培われた晶子の漢詩志向は、晶子の作品に自ずと表出するのは当然のことではないだろうか。

## 2、『みだれ髪』に見られる漢詩文の世界～『みだれ髪』のしかけ

『みだれ髪』は前述の通り、明治 34 年 8 月に刊行された晶子の処女出版である。『みだれ髪』出版当時の『みだれ髪』評には「あまりにも西洋的である<sup>(13)</sup>。」といった指摘などがあることや、それまでの晶子の「西欧をなつかしく思う」志向<sup>(14)</sup>が表出した西欧的作品<sup>(15)</sup>によって、『みだれ髪』を西欧風と見る先行研究は多い。確かに『みだれ髪』には表紙などの体裁から視覚的にも、また、章題や挿絵の画題に用いられた単語からも、一見して西欧風の傾向が認められる。

そこでまず、明治 34 年出版の『みだれ髪』の体裁に注目してみる。まず、表紙（前出「図 1」）について、

この書の体裁は悉く藤島武二先生の意匠に成れり

表紙畫みだれ髪の輪郭は恋愛の矢のハートを射たるにて矢の根より吹き出でたる花は詩を意味せるなり

と、巻頭で山吹色の文字で解説が施されている。この解説にある「恋愛の矢」はキューピットが放つ「恋愛の矢」であろうし、ハートと言うモチーフ自体もいかにも西欧的な風情である。

さらに、次に頁を繰ると、やはり山吹色の文字で「藤島武二畫」として「恋愛」「現代の小説」「白百合」「春」「夏」「秋」「冬」と挿絵の画題の目次が示されている。とりわけ「恋愛」「白百合」などの単語自体が、出版当時においては西欧的色彩の強いものである。実際、「恋愛」（前出「図 2」）では、目隠しをしたキューピットが矢を今にも放とうとしている場面が描かれている。（このキューピットが放った「恋愛の矢」が表紙に描かれている「恋愛の矢」と連想される。）

次には臙脂掛かった紫色の文字で「鳳晶子著」として「臙脂紫」「蓮の花船」「白百合」「はたち妻」「舞姫」「春思」と章題が示されている。第一章が「臙脂紫」であることと、インクの色が臙脂紫色であることがみごとにリンクしている美しい体裁である。そして、歌集の章題については「蓮の花船」は島崎藤村の『若菜集』（明治 30 年 春陽堂）の詩「蓮花舟」、「舞姫」は森鷗外の小説「舞姫」（『水沫集』明治 23 年 春陽堂）、いずれも評判の高い文芸作品を連想することはすでに先行研究でも指

摘されいることでもある<sup>(16)</sup>。特に「舞姫」は与謝野夫妻の敬愛する森鷗外作であり、鷗外がドイツ滞在経験を基に発表した「ドイツ三部作」と呼ばれる一つで、ベルリンを舞台とした恋愛が中心の小説である。また、先述したが、「百合」はキリスト教を象徴する花であるので、特に「舞姫」「百合」はいずれも西欧風が強く匂う章題名である。

そしてみだれ髪<sup>ミダレカミ</sup>の第 1 番歌は、1 頁目に（ここからは黒い文字で）「みだれ髪」「鳳晶子著」「臙脂紫」の後にページ構成としては一首のみの掲載である（他の頁は 1 頁につき 3 首が基本構成である。）。その『みだれ髪』巻頭の短歌は

夜の帳にささめき尽きし星の今を下界の人の鬢のほつれよ

と、まさにロマンティックそのものである。天上の「星」たちは恋をささやき合っているのに対し、地上では恋愛に心乱れ鬢（髪）をほつれさせて（乱して）いる場面で、これこそ『みだれ髪』のタイトルの由縁を導く歌である。星を擬人化する表現などはまさに「星莖調」と呼ぶにふさわしく、日本古来の伝統的和歌の表現とは異なり、西欧風の浪漫主義の表現が見られる。

このように、『みだれ髪』の体裁は確かに西欧風の印象を呈している。しかし、その内容についてさらに細かく見てゆくと西欧風一辺倒とは言い切れないのである。

例えば、表紙（前出「図 1」）には三つの輪が描かれているが、このモチーフは「金唐革紙」に好んで用いられた日本の伝統的モチーフの一つである。1873 年ウィーン万博において「金唐革紙」を日本の工芸品として出品し、それはヨーロッパでも高く評価された。いわゆるヨーロッパにおけるジャポニズムのきっかけとなったもののひとつである。実に西欧的な印象として目のとまる「ハート」や「（キューピットの）矢」の中に、実に日本的な「輪」のモチーフが混在しているのである。

そして章題について述べると、「蓮の花船」の示す景色は西欧の庭園に浮かぶ水蓮の中を進む船ではなく、寺の蓮池を進む小船であって、章の中に僧も登場し、仏教的色彩が強い。また、「舞姫」は、鷗外の描いた西欧のダンサーではなく、日本の京都の「舞姫」である。

つまり『みだれ髪』はその表紙や、挿絵と章題の目次、第一首の「夜の帳に・・・」から、西欧風な歌集であるとの印象を強烈に与えながら、その実は、完全な西欧風とは断言できない、より複雑な構造を呈している。一見、西欧風の体裁を示しながら、その実は、非常に古典を意識した美意識が示されている。その古典からの血脈で漢詩の世界を展開させながら、旧態の世界観を突き破るセンセーショナルな少女の恋を中心に世に問うている。これこそが『みだれ髪』のしかけなのである。

### 3 『みだれ髪』と李白

#### 3-1 鉄幹と李白によせるオマージュ

『みだれ髪』の構成では冒頭の「臙脂紫」98 首に続き、「蓮の花船」76 首が展開する。その 34 首目に

君が前に李青蓮説くこの子ならずよき墨なきを梅にかこつな

という歌がある。この短歌は明治 34 年 3 月「明星」の「おち椿」に鳳晶子として発表されたもので、唐の詩人李白（李青蓮は李白の異名である）の名を歌中に直接挙げていることが注目される。歌は「漢詩に明るいあなたの前で、李青蓮（李白）について説くことなど畏れ多いことだわ・・・良い歌ができないのを（鉄幹という梅の名前を持つあなたが）梅のせいにするなんてね。」と解釈する。与謝野寛はこの頃、梅の古木を意味する「鉄幹」と雅号を用いていた。この短歌では、鉄幹が漢詩に造詣が深いことを示し、晶子はその鉄幹と李白について会話していることが窺われる。また通常用いられる「李白」「李太白」ではなく「李青蓮」の李白の号を称するところにも晶子の漢詩文の素養が垣間見られる。

さて、晶子は明治 32 年 1 月 3 日に浜寺公園にて開催された、河井醉茗主宰の「浪華青年文学会堺支会」設立記念講演会に参加した。この「浪華青年文学会」には晶子の弟や鉄幹とともに堺の漢学塾で学んだ河野鉄南など、堺の文学青年らが多く参加した。堺での文学青年の活動はより活発になり、3 月 25 日に与謝野鉄幹は堺の浜寺公園・高師浜を訪れてこの地を歌に詠んでいる。明治 32 年 3 月 27 日「読売新聞」初出（明治 32 年 4 月「よしあし草」再掲）の鉄幹の歌は、

月を踏んで李白天降る歌もがな夕浪たかし松の風ふく

この歌は月を捉えようと水に飛び込んでしまった李白の最期の逸話を用い、「月を踏むことで、あの李白が降臨して見事な歌を歌いたいものだ。この夕浪に風が吹き付ける波高さが絶景の高師浜の景色を・・・」と解釈できる。実はこの歌の詠まれた約一年前、明治 31 年 4 月 15 日、晶子は「読売新聞」掲載の鉄幹の「草餅集」の短歌を目にし、非常に感動して、それまでずっと敬遠していた短歌の世界に足を踏み入れたのである。<sup>(17)</sup> 従って、晶子にとっては短歌の世界に足を踏み入れる決心をしたきっかけを与えられた「憧れ」の鉄幹が、晶子の地元である堺の浜寺・高師浜を訪れたことは心に残ることであり、さらにその際に歌われた短歌に、鉄幹が李白を用いたことは、晶子としては強く心に残ったはずである。

さらに浜寺公園・高師浜は晶子にとっては、なおさら生涯忘れられない場所となる。それは、この翌年、明治 33 年 8 月に開催された浜寺公園での歌会で、初めて晶子は尊敬する鉄幹と歌会に同席したのである。そしてこれを契機に二人は急速に接近し、惹かれ合い、やがては恋に落ちる。つまり浜寺公園は晶子と鉄幹の記念すべき場所なのである。

さて、前掲の「月を踏んで李白天降る歌もがな夕浪たかし松の風ふく」の鉄幹の短歌も、「君が前に李青蓮説くこの子ならずよき墨なきを梅にかこつな」の晶子の短歌も、いずれも鉄幹が歌をうまく詠みたいと願う場面と詩仙として名高い唐の詩人「李白」の組み



合わせが共通していることは注目に値する。特に晶子の「李青蓮・・・」の歌は、晶子と鉄幹が二人だけで栗田山に再来した明治34年1月の思い出を詠んだもの（最初の栗田山訪問は明治33年秋に鉄幹が晶子と山川登美子を伴い一泊した）と考えられ、二人の恋がよいよ燃え上がり、結実した生涯忘れ得ぬ「その時」の歌である。

このような晶子と鉄幹の恋愛の流れの中で、晶子が「君が前に李青蓮説く・・・」と、鉄幹の前で有名な中国の詩人の名を挙げて歌を詠むに、杜甫や王維や白楽天ではなく「李白」としたのは、晶子と鉄幹が恋に落ちるきっかけとなった思い出の場所で鉄幹が詠んだ「月を踏んで李白天降る・・・」の歌を踏まえているとが想起される。しかも、鉄幹が「李白天降る」と歌に用いた「李白」を用いているならば、晶子は音数の関係から「李太白」、少なくとも「李青蓮」よりは一般的な李白の呼称を用いてもよいところを、あえて李白の号の「李青蓮」としたところなどは、漢詩に詳しい鉄幹とやりとりするのにふさわしい女、漢詩の素養をもった女として「鉄幹に認められたい」と願う晶子の鉄幹を敬愛する気持ち、オマージュが表れたものと思われる。

このように、晶子の鉄幹と李白に対するオマージュは、鉄幹との出会いの時に限られたものではないことを次に示す。

昭和8年2月26日の寛（この頃は鉄幹と名乗るのは廃止していた）の六十の誕辰会があり、『梅花集』で晶子が祝いに詠んだその中に、

梅咲けば蕪村思ほゆその人が唐の詩人を思ひし如く

と言う歌がある。「梅」は先述の「鉄幹」の号からも、寛を指し、また、寛と「唐の詩人」を掛け合わせている。ここで「唐の詩人」は誰であるのかは限定されないが、日本の近世を代表する俳人である「蕪村」に対抗するような「唐の詩人」とするならば、それ相応の、詩仙・李白や詩聖・杜甫や詩仏・王維が当然想起されよう。（李白も杜甫も王維も当然ではあるが、「梅」を題材に詩を詠んでいる。）

次に寛が昭和10年3月に没し、憔悴した晶子が、同年5月に箱根の温泉に療養に行った際の歌を雑誌「冬柏」（昭和10年6月28日発行）に発表している。

唐の詩の翠微は山を云ふと聞くあしびの木にもあてましものを

この「唐の詩の翠微」であるが、「翠微」とは晶子の歌の通り、「山」を意味する語である。そしてこの「翠微」という語は李白の詩で用いられている語として有名である。中国の明時代の陳仁錫は『潜確居類書』の中で「翠微」を説明するに当たり、筆頭に李白の「贈秋浦柳少府」を示している。「贈秋浦柳少府」の詩は以下の通りである。<sup>(18)</sup>

贈秋浦柳少府 李白

秋浦舊蕭索，公庭人吏稀。

（秋浦は昔からもの寂しいところで、官人もあまり寄りつかない。）

因君樹桃李，此地忽芳菲。

（君のおかげで桃李の植樹をしたように、この寂しい土地も豊かになった。）

搖筆望白雲，開簾當翠微。

（筆をゆらして白雲を詠み、簾を開いて翠美しい山を望む。）

時來引山月，縱酒酣清暉。

（ある時には山の端の月を引き入れ、酒を存分に飲み月の清らかな光に酔う）

而我愛夫子，淹留未忍歸。

（あなたを心から敬愛しているので、帰るに忍びなく、こうして居るのです。）

晶子が寛の他界に悲しみのあまり憔悴しているその時に、「唐の詩の翠微は山を云ふと聞く・・・」と、山を眺め、李白の詩に有名な「翠微」を描き、歌中に「李白」とは明示せずとも、「李白」を匂わせ、さらに、その翠微の詩にある「我愛夫子」（＝あなたを心から敬愛している）と言った部分に、愛する寛を掛け合わせて詠み込んでいる。晶子の鉄幹と李白によせるオマージュと言えよう。

さて、晶子の『みだれ髪』は鉄幹との恋愛をテーマにした歌が多く収められている。

『みだれ髪』の第二章目の「蓮の花船」は蓮の花の咲く寺を舞台とした、仏教的な色彩の感じられる章である。その中に李白を詠み込んだ「きみが前に李青蓮説くこの子ならずよき墨なきを梅にかこつな」の歌があることは前述の通りである。この「蓮の花船」の冒頭歌は『みだれ髪』初出歌であることから、『みだれ髪』の「蓮の花船」冒頭歌の役割を担う目的もあって、新たに詠まれた歌と考えられる。

漕ぎかへる夕船おそき僧の君紅蓮や多きしら蓮や多き

また、「蓮の花船」の 60 番歌 61 番歌ともに『みだれ髪』初出歌で、章題の「蓮の花船」を歌に詠み込んでいることから、「蓮の花船」の意図が、冒頭歌「漕ぎかへる・・・」と同様に示されたものと考えられる。

男きよし載するに僧のうらわかき月にくらしの蓮の花船

経にわかき僧のみこゑの片明り月の蓮船兄こぎかへる

これらの二首から「蓮の花船」の景物がより明確に示されることになる。また、「経にわかき・・・」の「兄」は兄弟の「兄」を示す語ではなく、ここでは「親愛なる」という意味を持ち、晶子と鉄幹の二人の世界に限定すると、晶子の親愛なる「兄」その人は鉄幹と見立てることも可能であろう。なぜなら、鉄幹の父も兄も僧であり、鉄幹自身も、僧としての修行を積んでいたからである。

そして鉄幹はこれらの晶子の「蓮の蓮船」歌に返すような形で、明治 35 年 9 月「第三明星」に

ほそき棹に紅蓮しらはす水一里わかき李白のさめまさぬかな

と、晶子の描いた紅蓮と白蓮と若い僧の景物を引いて、その中に「李白」を明示させた。

この鉄幹の歌から、「蓮の花船」において、晶子と鉄幹の中では、「蓮」と「李白」の連鎖的な発想に共通理解が成立していたと考えられる。『みだれ髪』が晶子自身の実体験を伴った青春を大胆に歌い上げている歌が多く見られる特徴から、晶子には、「鉄幹、

李白、蓮」が一つのスキーマとして成立していて、また、このことは、鉄幹とも共通認識していた、または、二人の間でスキーマを形成するやりとりが存在したのではないかと仮定できる。さらには、晶子の描いた「蓮」の情景の中に鉄幹が「李白」を持ち出して漢詩の世界を明確化していることから、『みだれ髪』の「蓮の花船」は時空を超えた漢詩文の世界をも表現しようとした意図が見られる。

さらに「蓮の花船」の第2番歌は明治34年7月「明星」掲載の歌であるが、

あづまやに水のおとさく藤の夕はづしますなのひくき枕よ

この歌について逸見久美は「白居易の遺愛寺鐘歇枕聴」を引くと評している。<sup>(19)</sup> ことから、「蓮の花船」の冒頭部は、漢詩の世界を彷彿とさせる。

前述したが「蓮の花船」は藤村の「蓮花舟」を意識したものであるが、晶子の描いた「蓮の花船」は鉄幹と李白によせるオマージュであり、晶子と鉄幹が漢詩の世界を投影させたものと見られる。「蓮の花船」はその舞台が時空を超越した大胆で雄大なものとなっているのである。

### 3-2 『みだれ髪』に見る李白「清平調詞 三首」

晶子は楊貴妃に強く惹かれていたことは、先に示したとおりであるが、その楊貴妃と李白は同時代に生きた。李白はその詩才から玄宗皇帝に召し入れられ、楊貴妃とも面会が叶い、求められて楊貴妃に詩を編んだ。その詩が「清平調詞三首」である。実際の楊貴妃に面会し詩を作ることが叶った李白は、想像ではない、リアルな楊貴妃を眼前に歌っている点では、同じ玄宗皇帝と楊貴妃を題材に歌った白楽天の「長恨歌」とは趣を異にする。<sup>(20)</sup> 李白の楊貴妃はリアルだからこそその迫力において圧倒的なものがある。しかも、この詩によって李白は失脚をしてしまう。それは玄宗皇帝の宦官であった高力士が、李白の奔放な行いに対して立腹し、この詩を根拠に讒言したからである。楊貴妃を讃えた詩、「清平調詞三首」は、しばしば『みだれ髪』の中で、楊貴妃を彷彿とさせる場面で垣間見られる。そこでまずは、「清平調詞三首」を示す<sup>(21)</sup>。

清平調詞三首 李白

其一

雲想衣裳花想容（美しい雲は貴妃の衣装のよう、美しい花は貴妃の容貌のよう）

春風拂檻露華濃（春風は欄干を吹き渡り、夜露は濃やかにきらきらと輝く）

若非群玉山頭見（ああこんな素晴らしい美人には、あの群玉山のほとりでか）

會向瑤臺月下逢（瑤臺の月光の中でしかめぐり逢えないだろう）

其二

一枝紅豔露凝香（一枝の紅く艶やかな牡丹の花、露を含んで漂わせる濃密な香り）

雲雨巫山枉斷腸（雲となり雨となる巫山の神女との契りさえもこの美しさの前では

徒な恋心)

借問漢宮誰得似 (お聞かせ下さい。漢の後宮の美女の中で、誰がこの貴妃に似ることができるといのでしょうか)

可憐飛燕倚新妝 (ああ、なんと華やかな、一飛燕が新粧を誇るその姿)

其三

名花傾國兩相歡 (名高い牡丹の花と傾国の美女が、たがいとその美をよろこびあう)

長得君王帶笑看 (天子は楽しげに眺めて、あきることもない)

解釋春風無限恨 (春風ゆえに生まれる無限の恨み、その鬱屈を解きほぐすかのように)

沈香亭北倚闌干 (沈香亭の北、欄干に身を倚せた妃の美しさ)

玄宗皇帝が都長安の牡丹の花で有名な興慶宮で開花を愛で、楊貴妃を伴って宴を開き、李白を召した。そこに咲き誇るのと言わずもがな、牡丹であり、牡丹の美しさと楊貴妃の美しさを李白は並べ賞賛している。一方、白楽天の「長恨歌」では楊貴妃の美しさを示したものは「芙蓉如面柳如眉」であり、その美人の顔を形容する花は芙蓉で、眉は柳である。

さて、『みだれ髪』のなかでは、晶子のことは「萩」、山川登美子のことは「百合」と、鉄幹が名付けていた名前を用いて歌が詠まれている。ところが白楽天の「長恨歌」では楊貴妃を形容して用いられた「芙蓉」は、晶子と結婚する前の鉄幹の夫人であった林滝野のことを指す名前であったので、『みだれ髪』では林滝野と混同するのを避け、楊貴妃に対して「芙蓉」を用いず、李白の「牡丹」を用いて表現しているように見られる。

つまり、『みだれ髪』においては、李白の詩「清平調詞 三首」を引いて、楊貴妃を牡丹としている。そして楊貴妃は美しく、恋愛に生きた女性であり、それは時として晶子自身である。「牡丹」を用いることで李白詩へのオマージュと、傾国の美女楊貴妃と玄宗皇帝がつむいだ「激しい恋物語」を晶子と鉄幹の恋愛になぞらえる役割を果たしている。

李白が楊貴妃の詩を詠んだ、件の宴が夜ということもあってか、晶子が『みだれ髪』の巻頭の章「臙脂紫」で牡丹を詠んだ短歌全4首のうち、全ての歌の舞台は夜である。

まゐる酒に灯あかき宵を歌たまへ女はらから牡丹に名なき (臙脂紫・12番歌)

おりたちてうつつなき身の牡丹見ぬそぞろや夜を蝶のねにこし (臙脂紫・82番歌)

恋か血か牡丹に盡きし春のおもひとのゐる宵のひとり歌なき (臙脂紫・88番歌)

長き歌を牡丹にあれの宵の殿妻となる身の我ぬけ出でし (臙脂紫・89番歌)

「まゐる酒・・・」の歌は「臙脂紫の」13番歌

海棠にえうなくときし紅すて夕雨みやる瞳よたゆき

の「海棠」が楊貴妃を彷彿とさせる<sup>(22)</sup>ことから、12番歌の「牡丹」＝楊貴妃の連想を発展させたと考えられる。『みだれ髪』の中で初出の「牡丹」の花は、このように李白が「清平調詞 三首」で楊貴妃の象徴として用いた、牡丹＝楊貴妃を導き出す語として機能しているのである。このことによって、それ以降に歌に詠まれた牡丹の花にも、楊貴妃の連想のスキーマが与えられる。89番歌の「長き歌を牡丹にあれの・・・」では、「殿妻」

という日本古典の王朝の世界を表す語も同時に用いられているところから、歌の舞台は日本の王朝世界となろうが、「長き歌」「牡丹」という語の組み合わせは「長恨歌」「楊貴妃」を確実に想起させている。この連想から、この歌の直前の88番歌でも「とのゐ」という語から、直接的には王朝の雅を歌の舞台として思い浮かべることとなるが、後に連なる89番歌によって、「牡丹」は楊貴妃であることが確認される。

この表現の構造は、舞台を日本の古き代としながら中国の古き代を呈するという複雑な表現を含んだ『源氏物語』が、オマージュとして「長恨歌」を導き出しているのと同様である。

さらに「臙脂紫」以外に見られる牡丹を詠み込んだ歌は、牡丹の花に喩えられる傾国の美女・楊貴妃と玄宗皇帝の激しい恋物語と晶子が恋愛に想いが乱れることが相対し連想できるものである。

わが春の二十姿と打ぞ見ぬ底くれなゐのうす色牡丹（蓮の花船）

とどめあへぬそぞろ心は人しらむくづれし牡丹さぎぬに紅き（はたち妻）

裾たるる紫ひくき根なし雲牡丹が夢の真昼しづけさ（はたち妻）

白きちりぬ紅きくづれぬ床の牡丹五山の僧の口おそろしき（はたち妻）

以上、『みだれ髪』の中の合計8首の「牡丹」の花の歌であるが、「おりたちて・・・」と「とどめあへぬ・・・」の歌は『みだれ髪』が初出であるが、それ以外の6首は明治34年7月「明星」が初出で、いずれも晶子が堺から東京の鉄幹の元に単身上京した直後の歌である。そのような状況下にあるからこそその激しい二人の恋愛を表出するときに用いられた「牡丹」の花は、晶子の漢詩志向を示す一端となる。

そして「清平調詞 三首」で楊貴妃の象徴として示された牡丹の花であるが、これを素材にした歌を詠むことができるのは、当然、晶子の漢詩の素養があつてのことで、「牡丹」から楊貴妃、楊貴妃から玄宗皇帝と楊貴妃の傾国の恋愛、そして晶子と鉄幹の激しい恋愛という連想を紡ぎ、より趣深く歌を表現しているのである。

まとめ、

与謝野晶子の『みだれ髪』は西欧的であると評されているが、それ一辺倒ではなく、晶子の漢詩志向が垣間見られる。

この核となるのは晶子の敬愛する鉄幹によせるオマージュである。鉄幹は自身を回顧して、文芸作品創作の出発点は、父から教えられ学んだ漢詩文であつたとしている。このように漢詩をよくする鉄幹に対する晶子の敬愛の念は、鉄幹が「月を踏んで李白天降る・・・」と詠みあげて憧憬を示した李白に対しても同時にフォーカスされたと思われる。このような鉄幹と李白に対する晶子のオマージュは『みだれ髪』中、特に「蓮の花船」の章に漢詩志向として認めることができる。

佐藤春夫が『晶子曼荼羅』で示した晶子の類い希なる才能と漢詩志向は、晶子が楊貴妃のドラマチックな最期を短歌に表現するに当たって、杜甫の「哀江頭」を用いるに象徴される。「楊貴妃といえば長恨歌」の漢詩文の定石をあえて用いないような晶子の漢詩文の素養は、『みだれ髪』の中では「花の蓮船」の章に特に顕著にあらわれる。そして晶子の『みだれ髪』における漢詩志向を際立たせている。また、鉄幹・李白に対するオマージュを表現するに当たり、晶子は「清平調詞 三首」で李白が「楊貴妃」を示す花として「牡丹」を用いたことをふまえ、『みだれ髪』の中でも同様のモチーフとして牡丹を用いている。牡丹から楊貴妃、そして玄宗皇帝と楊貴妃の激しい恋、そして鉄幹との激しい恋へと連想を展開させることで、時空を超えた壮大で大胆な、そして優美な短歌世界を表しているのである。

なお、李白は「清平調詞 三首」で楊貴妃と玄宗皇帝の契りを「雲雨巫山枉斷腸」と「巫山」を用いて形容している。同様に『みだれ髪』においても、第三番目の章「はたちづま」の第10番歌、

君さらば巫山の春のひと夜妻またの世までは忘れゐたまへ  
と、李白の用いた中国古典の「巫山」の故事を用いて、晶子と鉄幹の恋が結実した明治34年1月の粟田山のできごとを詠んでいる。これは前述の「君が前に李青蓮説くこの子ならず・・・」の歌の詠まれた思い出と重なる時のものである。このことから、晶子と鉄幹のかけがえのない恋愛を歌うときには、晶子の漢詩志向がほとぼしっていることがうかがえるのである。

## 「注」

(1) 鳳昌子（「鳳」は旧姓。「昌」は「晶」の誤植）、明治34年8月15日、発行所東京新詩社・伊藤文友館

(2) 小清水裕子「与謝野晶子の楊貴妃の短歌―杜甫の詩との関り」2019年3月 日本文学風土学会「紀事」43号

(3) 小清水裕子「与謝野晶子が求めた女子教育の近代化」2020年、秋草学園短期大学紀要37号

(4) 大阪市 HP [大阪市：83. 広瀬旭荘（ひろせきょくそう）墓所](http://osaka.lg.jp)（…>文化・スポーツ・生涯学習>生涯学習）（[osaka.lg.jp](http://osaka.lg.jp)）（2021年10月現在）、日田市 HP [2代 廣瀬旭荘（ひろせ・きょくそう）／日田市（city.hita.oita.jp）](http://city.hita.oita.jp)（2021年10月現在）

(5) 文化庁「近世日本の教育遺産群」[近世日本の教育遺産群 | 日本遺産ポータルサイト（bunka.go.jp）](http://bunka.go.jp)（2021年10月現在）

(6) 注（5）に同

(7) 注（4）に同じ

(8) 『堺市史』第七巻 第三章（一五四）小林安石、昭和52年10月 清文堂出版

(9) 逸見久美『新版評伝与謝野寛晶子』2007年8月八木書店、濱久雄『与謝野鉄幹漢詩全釈』平成27年7月明治書院

(10) 与謝野晶子、大正4年12月、『歌の作りやう』、尚本文は『鉄幹晶子全集』6、勉誠出版による

(11) 樋口兼長のことか。『堺市史』第七巻 第四章（四二）樋口兼長に「樋口兼長は均太郎と稱し、朱陽と號した。家世々河内の丹南藩に仕へた。廢藩後來堺して生徒を教授した。人に接するに和易、交るに城府を設けなかつた。明治三十三年四月二十六日享年五十一歳を以て歿し、諡して靜孝といふ。越えて七月受業者相謀りて、墓碑を南宗寺の兆域に建てた。（墓誌）」とある。

(12) 注（2）に同じ

(13) 「明星」明治34年9月

(14) 明治33年7月26日河野鉄南宛て晶子書簡（逸見久美『与謝野寛晶子書簡集成』2002年10月25日 八木書店）に「ローマベルリンのそらなつかしのこゝろおさへがたく・・・」などとある。

(15) 逸見久美「ヨーロッパ的なもの」『新版評伝与謝野寛晶子』明治篇 2007年8月 八木書店

(16) 逸見久美『新みだれ髪全釈』平成8年6月 八木書店、今野寿美訳注『みだれ髪』平成29年10月角川文庫

(17) 注（9）に同じ

(18) 本文は『国訳漢文大成 続 文学部』昭和3-6年 国民文庫刊行会を元に作成しました。近藤元粹編『李太白集』明治34年7月 青山嵩山堂も参照し、大意を付しました。

(19) 逸見久美は「蓮の花船」54番歌「四十八寺そのひと寺の鐘なりぬ・・・」でも漢詩、杜牧「江南春」が引かれたと語釈している。『新みだれ髪全釈』平成8年6月 八木書店

(20) 「天寶中，白供奉翰林，禁中初重木芍藥，得四本紅紫淺紅通白者，移植於興慶池東沉香亭，會花開，上乘照夜白。太真妃以步輦從，詔選梨園中弟子尤者，得樂一十六色，李龜年以歌擅一時，手捧檀板，押眾樂前，欲歌之，上曰：賞名花，對妃子，焉用舊樂詞，遂命龜年持金花牋，宣賜李白，立進清平調三章。白承詔，宿醒未解，因援筆賦之，龜年歌之，太真持頗梨七寶杯，酌西涼州蒲萄酒，笑領歌詞，意甚厚，上因調玉笛以倚曲，每曲遍將換，則遲其聲以媚之，太真飲罷，斂繡巾重拜，上自是顧李翰林尤異於〔他〕學士。（台湾故宮博物院「全唐詩」[寒泉 \(ntnu.edu.tw\)](http://ntnu.edu.tw)（2021年10月現在））、松浦友久編訳『李白詩選』2012年2月岩波文庫

(21) 松浦友久編訳『李白詩選』2012年2月岩波文庫 の本文・訳を引用。

(22) 今野寿美訳注『みだれ髪』平成29年10月角川文庫では、この「海棠」について、「唐の玄宗皇帝が楊貴妃にたとえたせい、海棠の薄紅はどこか妖艶・・・」としている。

#### 〔参考文献〕

逸見久美ほか編（2001～2021）『鉄幹晶子全集』一卷～三二巻、別巻一～八 勉誠出版

逸見久美（2007～12）『新版評伝与謝野寛晶子』明治篇・大正篇・昭和篇、八木書店

太田登（2013）『与謝野寛晶子論考』、八木書店

小清水裕子（2014）『歌人古宇田清平の研究—与謝野寛・晶子との関わり—』、鼎書房

濱久雄（2016）『与謝野鉄幹漢詩全釈』、明治書院

真鍋正宏・田口道明・壇原みすず・増田周子編（2003）『小林天民と関西文壇の形成』、和泉書院

